神戸大学　大学教育研究センター　大学教育研究
第 13 号　(2004年度)　2005年 3月発行：47-57

授業改善に関する実践的研究
9．学生の将来目標と学習意欲についてのアンケート

米谷　淳（神戸大学大学教育研究センター教授）

授業改善に関する実践的研究

9．学生の将来目標と学習意欲についてのアンケート*

米谷　淳（神戸大学大学教育研究センター教授）

1．はじめに

入学直後から始まりしばらく続く学生の学習意欲の低下現象、いわゆる「なかだるみ」は実際に存在する。なかだるみしている学生に、いかに早く学びへの強い動機付けができるようにしてやるかは初年次教育の重要課題と言える。

大学生の勉学に対する意欲の喚起や動機付けは、大学への学びを含むキャンパスライフへの学生の適応問題のように思われるかもしれないが、これは現代を生きる広い意味での青年の発達課題ととらえるべきと考える。新入生は、大学合格をゴールとした詰め込み式、ドリル中心の受験勉強で体にしみついた構えを取り払い、自ら将来の目標を定め、プランを立て、新たな、そして、本当の意味での人生のスタートを切らなくてはならない。そういう意味で大学は「学び直し」、「生き直し」の機会であり、このことは青年期をはるかに超える年齢の社会人学生にとってもあてはまる。今も昔も大学は学問を究めるだけでなく、自己を見つめ、これまでを振り返り、各自のライフコースを構築（あるいは再構築）するためのかけがえのない時間であり場所であり機会である。それは、さまざまな線路から到着した列車が一旦停車して、次への旅の準備をし、ある列車は同じ線路を、ある列車は別な線路に切り替えて進んでいく駅のような役割を果たしている。駅の中でのさまざまな人々と触れ合うことにより、あるいは、思索する時間の中で反省したり将来設計したりすることにより、その後の旅への勇気や力や情報を手に入れる。この駅にたとえられる機能は広い意味での青年期の発達支援と言えるだろう。大学がこうした機能をどのようにサポートすべきか、あるいは、サポートしていくことができるのか。本稿ではこれについて、いくつかのアンケート調査の結果と筆者がこれまで行ってきた授業実践を踏まえながら考察してみることにしたい。

2．初年次教育をめぐる国内外の動向

大学教育の課題のひとつは青年期の発達支援であり、それを課外活動や学生相談室などの課外的要素だけでなく、授業にどのように取り入れ、それぞれの大学にふさわしい効果的で個性的な内容と方法をつくりあげ実践していくかが日本でもますます大切になっている。[1]

英国にはGAP YEARという制度がある。これは、大学入学を決めた学生に1年次の課程に進む前に1年程度外国でボランティア活動などの社会経験を積むことを認める制度である。倉敷芸術科学大学では企業学科のカリキュラムに取り入れている。[2]

日本では、新入生に対する合宿旅行や学生自治会などを巻き込んだ新入生歓迎プログラムの伝統や、私学にみられる、厚生施設や課外活動センターの整備といった、いわゆる「グレイゾーン」の拡充競争はあるが、青年期の心理面のサポートに焦点を当てた活動はそれほど多くはない。確かにカウンセラーや精神科医による優れた授

---

*本論稿の内容は平成16年2月28日に京都で開催された大学コンソーシアム京都主催第9回 FD フォーラム・第1回高大連携教育フォーラム—生徒が学生に成長するために—において、「大学の初年次教育をめぐる国内外の動向—学生の意欲の観点から—」という題目で口頭発表された内容を基にしており、その抄録は平成16年11月に発行された『2003年度第9回 FD フォーラム・第1回高大連携教育フォーラム報告集—生徒が学生に成長するために—』の190-193頁に所収されている。本論稿はその抄録に図表を加えて書き改めたものである。

業実践もみられる[3]が、通常の講義形式、知識伝達型の授業で学生にじっくり自己分析をさせることは困難であり、それなりの効果をあげるには工夫が必要である。

学生に「ふりかえり」のきっかけを与え、他の学生とのインタラクションから「気づき」、すなわち、深い自己認識と自己変革への動機付けが得られる授業をつくろうとする動きがある。京都大学で実施されてきたいくつかの授業実践[4]はそのひとつといえるだろう。神戸大学で私は「自己と他者」と題する少人数のグループセッション中心の授業実践[5]に取り組んできた。この報告では、まず、アンケート調査の結果をもとに現在の大学生の学習意欲の実態をみてみることにする。次に、私がたずさわった「自己と他者」の特別授業を紹介し、青年期の発達支援のための参加体験型、グループセッション中心の少人数形式の授業の意義について考えることにしたい。

3．大学生の生活実態の経年変化

神戸大学の学生がどのように変わってきたかをみてみることにしよう。神戸大学では昭和 52 年から大体３年おきに全学生の５分の１をランダムに抽出して学生生活実態調査[6]をしてきた。有効回答は毎回 1000 人前後であるが、その調査結果を通覧したところ以下の点がわかった。

- サークルに入っている学生の割合は平成７年まで７割で一定だったものが、その後減少し５割近くに下がっている。これはいわゆる「学生のクラブ離れ」を示すものと考える。
- 進学目的は専門知識・技能、教養、就職有利の３つが高く十年来変化はない。が、本学受験の動機は変化している。昭和６１年までは「地理的条件」がトップだったのが、平成７年からは「大学の特色」がトップとなっている。また、「偏差値による合格可能性」が選択肢に加わった平成７年から、この項目の選択率がつねに上位３位以内であり、割合も少しずつではあるが増加の傾向にある。
- １日あたりの平均勉強時間は１時間未満の者が７割近くいるが、平成７年からは「１時間以上」と答える学生の割合が少しずつ増えている。
- 授業へよく出席する学生の割合も増加している。平成２年に６割だったものが、平成１３年には８割になっている。
- 「授業に出席しない」と回答した者に対して平成２年からその理由を聞いているが、そこにも変化がみられる。「授業に魅力がない」が毎回トップであるが、その割合は平成７年から平成１３年までに１割減少した。「課外活動のため」が２位であったが、平成７年から減少しだして平成１３年には第４位になった。それに対して、「成績と出席は関係ないから」「なんとなく」の割合が増えている。「勉強しようとは思わない」の割合はわずかではあるが平成７年から減少している。
- 授業の理解度は平成７年から上昇している。今では、８割程度の学生がだいたいの授業を理解している。
- 授業への満足度も平成７年から少しずつ上昇している。
- 教官との接触も平成７年から少しずつ増えている。

学生生活実態調査の結果をみると、神戸大学では平成６年からの教養改革以降、学生も授業も漸進的によくなっていることが示唆される。確かに授業の理解度や満足度も少しずつ上がっている。しかし、クラブ離れや偏差値重視の入学者の増加など気になる傾向もある。これらは大学生の質的変化を示すものといえるが、学生生活実態調査では学習意欲について直接調べているものではない。そこで、一昨年、筆者の授業中にアンケートをしてみることにした。

4．大学生の将来目標と学習意欲―文系私大生の場合―

ここでは文系私立大学生を対象に同様のアンケート調査を行った結果を紹介する。伊丹市のある私立大学の大学生 36 名（建築コース、心理系コースの３・４年次生）を対象に、「質問１（１）あなたは大学入学前に将来

何がしたいか決まっていたか、（２）今はどうか。」「質問２（１）実際に大学に通ってみての感想（大学に対するイメージの変化）は、（２）勉強意欲についてはどうか。」について自由記述形式で回答してもらった。自由記述をもとに、それぞれの問いについて集計を行った結果を図１～図３に示す。

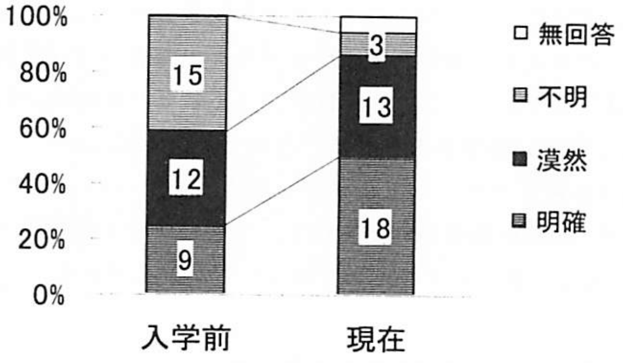

図1　大学生の進路と意欲に関するアンケート
1. 将来の目標（文系私大生36名）

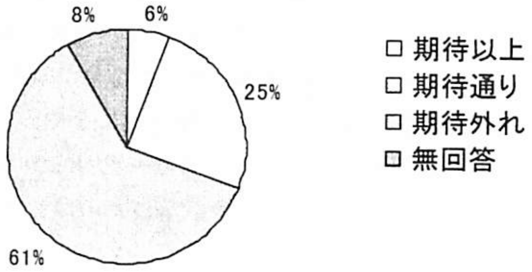

図2　大学生の進路と意欲に関するアンケート
2. 入学当時の大学への印象（文系私大生36名）

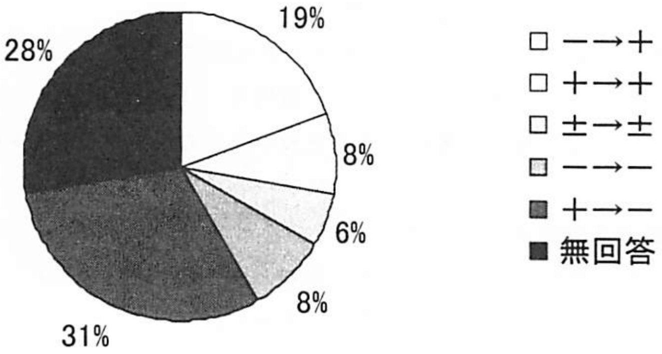

図3　大学生の進路と意欲に関するアンケート
3. 学習意欲の変化（入学時→現在）（文系私大生36名）

図１は入学前、入学直後、現在の３つの時点における将来目標についての質問項目の集計結果である。回答者は大半が３年次生であるので、図１から３年次までに８割近くの学生が将来目標を明確にもつようになることがわかる。図２は入学直後における大学への印象についての集計結果である。図２から期待外れと感じる学生が、期待通り、あるいは、期待以上と感じる学生の２倍もいることがわかる。図３は学習意欲の変化についての集計結果である。無回答が３割いるとはいえ、学習意欲が入学時より現在の方が高まった学生が２割であるのに対し、低下した学生は３割いる。これは「なかだるみ」が相変わらず続いている学生が少なくないことを示している。

以下に、典型的と思われる自由記述をあげる。

- 質問１（１）決まっていなかった。正直大学３年くらいまでに将来を見つけられればと思っていた。（２）漠然と見えている。答えの先のばしはもうできないということを痛感している。質問２（１）１年生の前期は思っていた通りの大学生活だった。勉強も人間関係も一人暮らしも思っていた感じだった。（２）１年、２年、３年と年々勉強への意欲がなくなってきている。一人暮らしでだらけていたのが原因だ。（４回生、男）
- 質問１（１）大まかな目標はあったが、はっきりと仕事としては考えていなく、心理学を勉強したいと思っ

ていた。(2)今ははっきりとしているが、逆にその目標が達成できるかという点で不安がある。質問2(1)入学前、大学はもっと自由だと思っていた。それと専門的なことが多いとも思っていた。(2)やる気は(入学時と)別に変わっていないと思う。(4回生、男)

- 質問1(1)なりたい職業があったが、自分には適性がないと悩んでいたため、大学に入ってからじっくり考えようと思った。だから、将来の夢は漠然としていた。2)大学でさまざまな授業を受け、様々な人に出会って意見を聞き、また、様々な体験をすることによって、大学入学前からやりたいと思っていた職業を目指すことにした。だから、今は将来の目標[教員]がはっきりしている。質問2(1)専門性の高い勉強ができると思っていたが、そうでもなかった。しかし、幅広い勉強ができたという点では期待以上だった。また、良い先生や友人と知り合えたことや、いろいろな体験ができた、というのも期待以上だった。(2)漠然とでも目標(なりたい自己像も含む)があったので、幅広い勉強がしたくなり、入学前よりも学習意欲が高まった。入学前に意欲が低かったのは、今在籍する大学が第一希望の大学ではなかったからである。(4回生、女)
- 質問1(1)私は高校の時にあるカウンセラーに出会って、自分もその仕事に就きたいと思ったので、心理学が学べる大学を探してここに来た。(2)気持ちに変化はない。むしろ具体化したとは思う。でも、その難しさもわかったのでプラスマイナスゼロ。質問2(1)もともとすごい期待をしてたわけではなかったので、「まあこんなもんか」程度。(2)やはり始めはがんばるもんだが、なかだるみするものだ。でも、最近はまたがんばりだしている。(3回生、男)
- 質問1(1)全く決まっていなくて、とりあえず大学に入った。(2)将来的にやりたいと思う夢はあるが、それまでのステップがまだ決まっていない。質問2(1)授業はある程度想像通りであったが、大学生活は期待はずれだった。(2)自分の興味のもてる授業が少なく、単位を取得できればいいという認識である。(3回生、男)

なお、勉学意欲低下の理由については、「なまけぐせがついた」「授業が難しくなった」「専攻についての興味が薄れた」「高校と大学の授業内容がそれほど変わらなかった」「専門について入学前にイメージしていたものと実際のものとのギャップが大きかった」などがあった。

5．大学生の将来目標と学習意欲—文系国立大学の場合—

次に神戸大学の私の授業で実施したアンケートの結果をみてみることにする。私が担当する心理学関連の教養科目(教養原論「心と行動」)を受講していた学生(文学部、発達科学部の文系学生がほとんど)133名(男68名、女63名;1年58名、2年50名、3年6名、4年以上16名)を対象に、将来の目標、学習意欲、導入教育の3点について質問紙(選択式11項目、自由記述1問)に回答してもらった。

将来の目標については大学入学前には約半数が「不明」であったのが、現在では逆に半数以上が「明確」と答えている(図4)。将来の目標が入学前と現在とでどのように変化したかについては、「目標がそのままで強まった」とする者が16%程度であるのに対して、「分からなくなった」(20%)「別のものになった」(17%)とする者もそれに勝るとも劣らぬほどいる(図5)。学習意欲については、「大いにある」「ある程度ある」と答えた者の合計をみると、入学時には7割程度であったものが、入学直後5月ごろまでにその半分になり、現在は6割になるという「なかだるみ」の傾向がみられる(図6)。

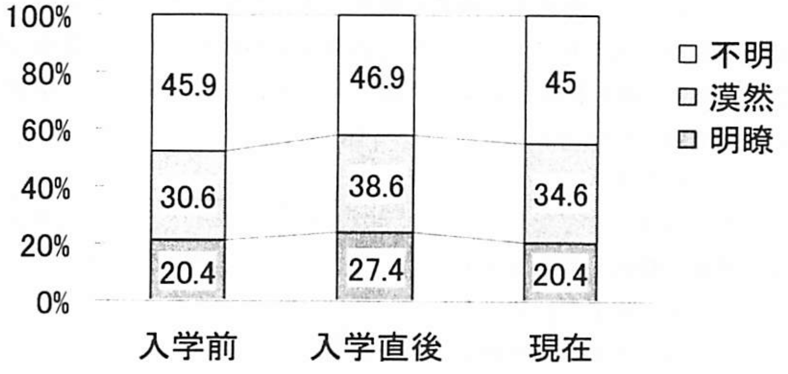

図4　大学生の将来目標と学習意欲についてのアンケート
1．将来の目標（文系国立大学生133名）

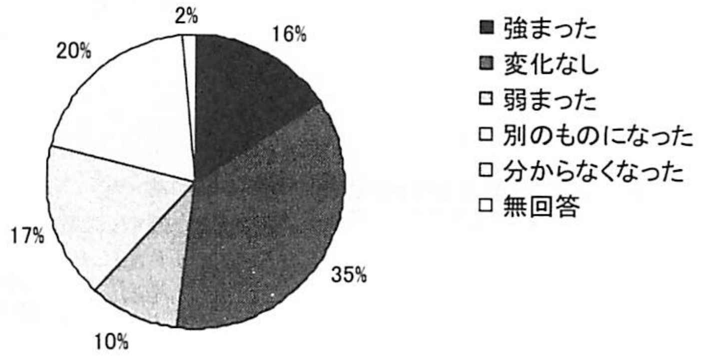

図5　大学生の進路と学習意欲についてのアンケート
2．将来目標の変化（文系国立大学生133名）

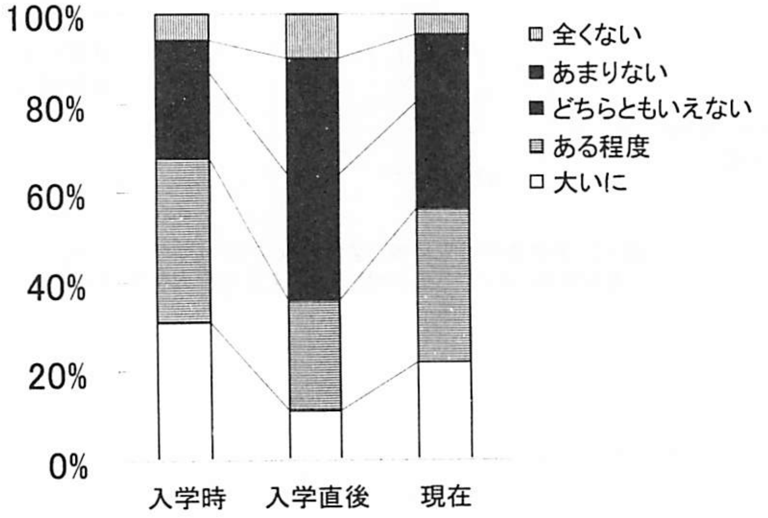

図6　大学生の将来目標と学習意欲についてのアンケート
3．学習意欲の変化（文系国立大学生133名）

導入教育についてはほとんどの学部で、オムニバス形式の「顔見世授業」や少人数ゼミなどを実施している。導入教育についての質問項目の集計結果を図６～図１０に示す。これらの図からわかるように、筆者の授業を受講している学生のうち 9 割がそれぞれの学部で導入教育を受けているが、ふさわしさ、満足度、学習意欲への効果のどれをみても、その評価はよくもなく悪くもないといったところである。

次に導入教育についての学生のコメントを紹介する。

- 自分がやりたいと思っていた内容のものはほとんどなかった。しかし、私がとったゼミはかなり充実した内容で、学生が自主的に有名建築家の建築を撮影してきたものについて、ひとりひとりが考えるというものだった。その充実さが良かったし、学生主体の授業がおもしろかった。
- 入学時にやろうとしていた研究内容を、４回生の研究で終えることは難しいということをゼミの教員に聞いたので将来の目標が薄らいだ。

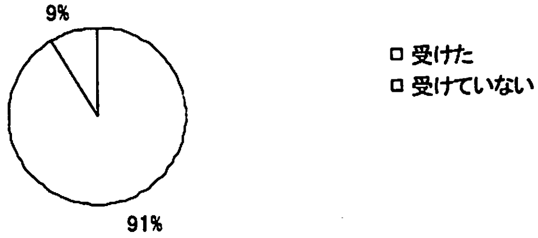

図7 大学生の将来目標と学習意欲についてのアンケート
4. 導入教育を受けたか（文系国立大学生133名）

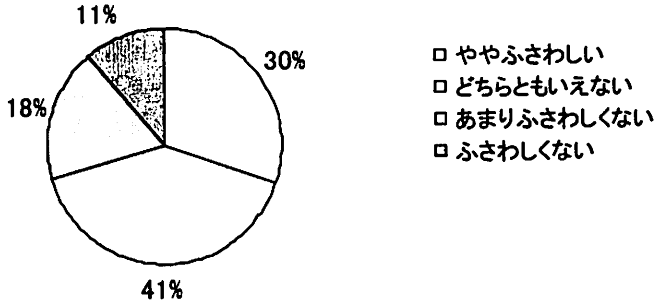

図8 大学生の将来目標と学習意欲についてのアンケート
5. 導入教育はふさわしいものだったか（文系国立大学生 133名）

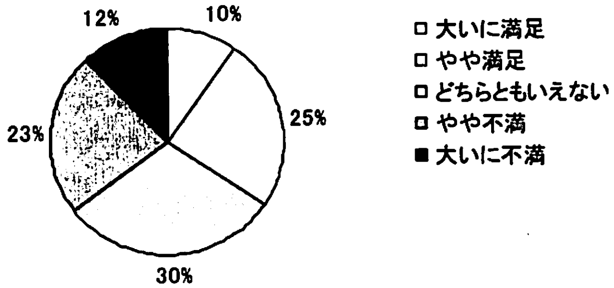

図9 大学生の将来目標と学習意欲についてのアンケート
6. 導入教育の満足度（文系国立大学生133名）

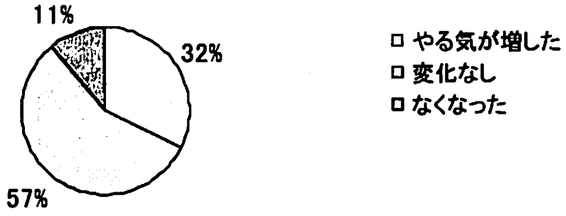

図10 大学生の将来目標と学習意欲についてのアンケート
7. 導入教育によりやる気が増したか（文系国立大学生133名）

以下にやる気をなくす要因についての学生のコメントを紹介しよう。

- カリキュラムが楽すぎる。単位をとるのも楽すぎる授業が多い。教員の休講が多い。
- 学習意欲を低下させているのは授業だと思う。やりたいことがあるから大学に来ているのに、自分のやりたくないことまで授業を受けなければならないのは学習意欲を低下させる一番の原因だと思う。でも、新しいことに興味をもてたりもした。

次に将来の目標と学習意欲について回答者が書いた事例を２つ紹介する。

・ 将来の目標を決めたのは、小学生のころで、そのころから変わっていません。でも大学入試の時に自分の目指す学部に行くことができなかったので今の学部にいます。でも、アルバイトではじめたことが自分の目指した目標と近いところでするものだったので、また刺激をうけて、目指してみようという気持ちが強まりました。学習意欲もなくなることなく、前とかわらずあります。
・ 入学当時、造形表現を総合的な視点から学べると思い向学意欲がたくさんありました。しかしながら、授業の内容が予想していたものと大幅にかけはなれていたので、向学心はみるみるうちになえてきました。その後、私は造形に対し、「現場の仕事」という観点にあこがれ始め、休学して実際の企業で働き始めました。数年間ののち復学してみると、大学の授業がとても楽しいものにかわりました。現在も働きながら大学に通っていますが、知識が最終的にどこで活かされるかを知っているので、大学の授業も含めて勉強することが楽しいと感じています。

これらはインターンシップの意義と効果を示唆するものと言えるだろう。

学習意欲を低下させる要因について回答者に自由記述させたところ、「授業（勉強）がわからない」「授業（勉強）の意味がわからない」「嫌い（苦手）な教科だから」「先生が嫌い」「教室（クラスメートや全体の雰囲気）が嫌い」「他にもっとやりたいことがある」といった小中の生徒と同じ要因の他に、大学生の場合には広い意味での青年期特有の要因が加わるということがわかった。大学生にとっては自分の将来やアイデンティティが定まらないと、あるいは、自己について理想と現実のギャップを知り、それに折り合いをつけていくことができなければ、なかなか腰を据えて落ち着いて勉強することができないということである。

6．特別授業「自己と他者」の授業実践

私は平成 10 年、11 年、12 年の３年間、毎年「自己と他者」と名づけられた特別講義を企画･実施した。「自己と他者」は文部省教養特別講義カリキュラム推進経費の補助を受けて開催された大学教育研究センターの全学共通授業科目であり、他の教養の授業と異なり少人数授業であり、しかも、５名（うち４名は非常勤講師）の担当者がそれぞれ１日ずつ受け持つ集中講義であった。ねらいは知識伝達ではなく自己理解であり、グループセッションと個人作業を通したふり返りが授業の中心であった。この授業実践については本誌や別な場所（文末に掲げる）で報告しているのでそれを参照されたい。

私は私の担当回の授業だけでなく、すべての授業に出席し、毎回学生の感想文を読み、授業についての学生インタビューを行った。この作業を３年間続けることにより、現在の若者や、大学に戻ってくる社会人の状況を少しは理解することができた。彼らにとって大学は人生目標を考え、プランを立て、歩みだす出発地点、すなわち、「学び直し」「生き直し」の場所となっていることがわかってきた。以下に、それを物語る学生の授業感想をいくつか紹介する。

・ひとつひとつの作業にそれぞれ意味があり、この２コマという短い時間では充分に消化できなかったように思う。日常何となくこれが「自分」かなと思うことはあっても、他人から見られている自分を意識することは年々減ってきたようである。（青年期の頃の私は人から自分がどう見られているかを常に考えていた）

現在の私は楽に生きているように感じるが、他者の目を意識しなくなっていることは自分にとって良いことなのか悪いことなのかがわからない。（発達科学部１回、社会人女子）

・まさに、今、自分が悩んでいること――「私」って何？一体何がしたいの？――ということを言葉に表してもらったというカンジだ。

悩むと際限なく悩んでしまうから、自分のことで悩まないように気をつかってきた。でも、一度、この資料にもあるように自分を客観的に、つき離して考えてみようと思った。

また、「女性の方が悩みやすいの？」とも思った。

「悩みというのは誰にでもある。悩んでいるのは自分だけでない。」と気づいた。グループワークをしているメンバーは、それぞれ、いろんなバックグランドがあるみたいなので、一回飲んでみたら面白そう（笑）。

心理学やカウンセリングを専門にしていらっしゃる先生方というのは、精神面で悩むことはないのだろうか？他人のマイナスの感情を受けとめるわけだから、ものすごく負荷がかかるように思うのだけれど。

グループワークをもっとやってみたかった。客観的に見える”自分の長所”にもっと気づいてみたいとも思った。こわいけど、自分の短所についても他人の意見をきいてみたい。（経営学部４回、女子）

・私は２０代の頃に強烈な心的ショックを受け、精神科やカウンセラーの世話になるほどひどい精神状態だった。原因が人間関係に属するものだったため、あらゆる人間（自己、他者、全て）とのつながりを断ちたいと思っていた。

しかし、今、当時のトラウマを抱えつつもなんとか普通の日常生活を遅れるのは、そんな私を支え、助け、励まし続けてくれた他者（家族、友人、医者 etc...）のおかげだと心から思う。

よって今は、まわりの人々に感謝の気持ちを忘れないように毎日すごしているし、その人々のことを私の方も理解し、助けていきたいと思う。

「自分をよく知り、自分と他人との関係を通じて他人をよく知る」という一文が心に強く残った。若かった自分にとってあの時の壁はあまりにも大きかったが、なんとかそれを乗り越えたことで自分も少しは成長し、大人になったのかもしれない。（発達科学部１回、社会人女子）

・他者とのかかわりの中から自分が見えてくるという話がありましたが、今日も若いメンバーとＧＷをすることができ、自分の当時のことをいろいろ思い出すことができました。自分について、あまり深く考えることもなく、のほほんと、その日その日を過ごしていたことや、就職活動で内定を勝ち取るために、自分に求められているのは何なのか、今の自分に足りないものは何なのか、本当に自分がしたいことは何なのか、いろんなことを考えさせられたこと、あっさりとことわられて、自分を全否定されたように感じたことなどです。

そんな自分の姿をなつかしく、ほほえましくながめられるようになったのは、成長したということでしょうか。

今も悩みがあっても、いつかこんな風にふり返ることができる日が来るように、しっかり悩んで乗り越えていきたいです。（発達科学部１回、社会人女子）

・この授業のうわさは、去年この授業を受けた友人から聞きましたが、他の授業とは全く違う形態で、興味深いです。自己をみつめる、知るというのは、たぶんしんどい作業だと思うのですが、あえてそうすることが成長へつながると思い、この授業をとることにしました。確かに”悩む”ことが自分と向き合う、自己の成長のステップであると思います。しかし”悩む”方法も人それぞれ違い、その悩む方向性によっては命をおとしかねない危険もあると思います。私のとても親しい友人が鬱病になり、自殺企画がなんどかあったという経験が、私の今の進路にも大きく影響していると思われます。”カウンセラーになりたい”という夢があるので、より自分のことを知り、自己理解したうえで成長していくためのきっかけにしたいと思います。（発達科学部３回、女子）

・最初は「何やらされるのか」という不安で始まりましたが、やっていくうちに、「私」を知るには、他人の存在が必要なことを強く感じさせられた時間だったと思います。いくら日常的な人間関係の中で「私」を見ようとしても、なかなか見えてないのが今の私の現状だったと思います。そこで、今回の授業のようなスピーチの時間を設け、非日常的な場面（私にとってはですが）で私を試されることで、自分についての意識が変化したと思います。「私」というものを自分の中でぐちゃぐちゃ考えてる時も必要だとは思いますが、言語で人前で他人に伝えようとする時間も、積極的に定期的に作っていこうと考えてます。

今日は本当に楽しい授業で、まだまだ続けてみたかったです。ありがとうございました。（文学部２回、女子）

7．おわりに

教育はそもそも連続と非連続をどのように組み合わせるかがポイントである。大学教育でも高大連携や未修分野の補習授業といった連続についてのケアに勝るとも劣らぬほど、初年次における導入教育・転換教育という非連続が重要である。通信衛星を地球の軌道上にのせるために打ち上げるロケットは、切り離しがうまくゆかなければ成功しない。イニシエーション、すなわち、高校までの教育で身についた学習態度からの離別と新たな学びへの切り替え、構えの転換こそが、大学生の意欲を高め、学習への動機付けとなる。そのために、教員が各分野での初年次教育の意義と方法を考え、工夫するだけでなく、青年期の大学生の成長を支援するプログラムを専門家と協力してつくりあげていくことが必要だろう。こうしたプログラム[7]は、それぞれの大学が高校生（受験生）や社会（受験生の両親や就職先の企業を含む）に対して自分の大学を特色づける大事な要素となっている。大学教員が、そうした発達支援のプロフェッショナルとなるべく、各自が青年期の心理について学び、互いの情報を交換しながら、現代日本の大学生をしっかり受け止めるための、個々の大学の枠を超えた横断的な組織や活動がますます必要になってくるだろう。

＜注＞

1. 中央教育審議会答申(平成１４年２月２１日)「新しい時代における教養教育の在り方について」では「３ 大学における教養教育」の中で、「生涯にわたる人格の陶冶を考えた場合，１０代後半から２０代前半にかけての時期においては，社会の中での自己の役割や在り方を認識し，より高いものを目指していくことを意識した知的訓練を行うことが重要である。・・・大学の教養教育はこうした知的訓練の中核を占めるものであり，学生には，学ぶ意識を高く持ち，主体的にこの訓練に取り組む姿勢が求められる。」として、GAP YEAR などの制度を紹介し、「我が国においても，大学を休学して長期間のボランティア活動に取り組んだり，職業経験を積んだ後に再度大学に入り直したりといった「寄り道」をすることの意義を社会全体で認識し，評価する必要がある。」と主張している。
2. http://www.kusa.ac.jp/indexj.html　を参照。
3. 例えば、人見一彦「女性の成長と心の悩み」（創元社）は、神戸女学院大学でそうした授業がなされていたことを物語っている。また、九州大学では精神科医として、作家・作詞家として有名な北山修教授の授業が大変な人気を博しているという。
4. 京都大学高等教育教授システム開発センター編『開かれた大学授業をめざして－京都大学公開実験授業の一年間－』、玉川大学出版部京都大学高等教育教授システム開発センター、1998 年；京都大学高等教育教授システム開発センター編『大学授業のフィールドワーク－京都大学公開実験授業』、玉川大学出版部、2001 年
5. 米谷　淳『特別講義「自己と他者」の授業記録－学生の感想文をもとに（大学教育研究別冊第６号)』、1999 年；米谷　淳「授業改善に関する実践的研究　４．少人数授業でのふりかえり」、『大学教育研究』第７号、39 頁～ 49 頁、2000 年；米谷　淳・西垣悦代『特別講義「自己と他者」の授業記録－「人間関係入門」「女性のライフコース」の講義録－（大学教育研究別冊第８号)』、2000 年；米谷　淳『特別講義「自己と他者」の授業記録－学生の気づきと学び－（大学教育研究別冊 10 号)』、2001 年
6. 神戸大学学生部、『平成 13 年度学生生活実態調査報告書』、2002 年
7. ブリバード大学のランディ・スウィング博士が昨年、関西国際大学で一年次教育についてのワークショップを行い、新入生を対象とする様々なアクティビティーを紹介している(関西国際大学高等教育研究所　2003 高等教育研究叢書、４号、125-171 頁)。彼が紹介しているグループワークやふりかえりを中心とするプログラムは、筆者が「自己と他者」の授業で用いている手法とよく似ている。

＜参考＞

1） 特別講義「自己と他者」の授業記録－学生の気づきと学び－
http: //www.kurihe.kobe-u.ac.jp/maiya/bessatu10.htm

2） 特別講義「自己と他者」の授業記録－「人間関係入門」等の講義録－
http://www.kurihe.kobe-u.ac.jp/maiya/bessatu8.htm

3） 特別講義「自己と他者」の授業記録－学生の感想文から－
http://www.kurihe.kobe-u.ac.jp/maiya/bessatu6.htm

An action study on the improvement of teaching and learning in general education: 9. a survey of students' decision-making of life course and motivation to learn

Kiyoshi MAIYA (R.I.H.E., Kobe University)

General education in university, especially, first year program has a function to support students not only in adaptation of new learning environment, but also in solving their developmental task, i.e., decision-making of their life course. It seems that students who feel difficulty in their task can hardly be motivated to learn. In order to examine their decision-making of life course and their motivation to learn, survey was conducted in a private university (N=36) and Kobe University (N=133). The results show that motivation to learn falls into a slump after entrance into university which continues for a few years and that the students have decided their life course after their graduation during their school days. Compared with the introductory course (omnibus lectures) provided in the first year by each faculty, activities such as group discussions, writing reflections, and personality tests in "Self and others" is suggested to be more effective and more attractive. The importance of first year program as well as training of instructors ' skills in faculty development is discussed.